

北齋と九鬼藩川村平右エ門家

出自説についての一試論

加藤 薫
川村 兼章

第一章 北齋の出自の謎

北齋は宝暦一〇年（1760年）江戸の本所割下水に生まれた。父は川村清七（仏清）、母は御用鑑師中島伊勢の姉である。飯島虚心著『葛飾北齋伝』に「北齋常に『我が母は赤穂義士に討たれた小林平八郎の孫女形なり』とある（注1）。北齋が三四歳の時、寛政五年（1793年）に叔父である中島伊勢に養子として迎えられた（注2）。安田剛蔵（注3）は中島伊勢について次のように書いている。「幕府から拝領した屋敷に住み、準武士の扱いを受けた職業で収入も中級武士以上で、苗字帯刀を許され正月には將軍への目通りまかなった」とある（注4）。ところが、寛政七年（1795年）北齋が三十六歳の時、北齋は中島家の相続権を長男の富之助に譲っている。しかし、北齋は常に中島姓を用い、川村姓を隠していた。にもかかわらず、嘉永二年（1849年）に北齋は九〇歳で死亡すると、元浅草の誓教寺に川村家の一

員として葬られた（注5）。誓教寺の過去帳にも川村と書かれている。

北齋の出生については、はなはだ込み入っていて議論が絶えない。北齋の孫娘の白井多知女によると北齋は川村某の子であると言っている一方、飯島虚心は、その内容を「疑うべし」として、中島伊勢を北齋の実父であるかのように書いている（注6）。

この事例のように、北齋の出自説には様々なものがあり、整理すると次のものが挙げられる。

(一) 母の実家が川村であったとする説（評論家林美一、評論家安田剛蔵）

(二) 北齋の出身を川村家とみるべき説（北齋の孫娘白井多知女、評論家瀬木慎一）

(三) 北齋の父方親族が吉原遊郭の茶屋（井筒屋）の川村であるという説（評論家荒井勉）

また出自の問題とはややかけ離れるが、北齋の出生が

謎に包まれている原因として、北齋が幕府の隠密だったという人もいる。高橋克彦の説によると、モリソン号事件の前に北齋が浦賀に潜居していた点、大塩平八郎らと交流し、倒幕の志士達と通じていたとされる小布施の高井鴻山との交友関係があつた点(注7)、シーボルトやオランダ商館ヘンミー事件の関係、北齋が生涯江戸を中心に九三回引越した事、北齋の次男崎十郎が、加瀬家へ養子に入り、小人目付、徒目付になつた事(注8)、北齋の総所得が現在なら一五億円に相当する額を稼いだのに貧乏だつた事、これらから隠密説が考えられるという(注9)。

(一)の母の実家が川村であつたとする説は、北齋や孫娘の白井多知女も語っていないが、安田剛蔵によると、母は先代中島伊勢の妾でその子供が北齋であると述べている(注10)。中島家のように、將軍への目通り可能な家であれば妾の存在は推察できる。しかし、そのような家への養子縁組を北齋は反故にできたのだろうか。

本論で川村は(二)説に準拠しつつ新解釈を試みるものだが、この立脚点から安田説を補強すると、養子相続権を長男の富之助に譲れる年齢、即ち、北齋が三〇歳代前半に川村家の存続のために北齋自身の養子縁組を解消しなければならぬ程の危機があつたのではなからうか。

北齋には長男の下に男子が複数いたのにもかかわらず、一人も川村家の後を継がせていないことから、晩年には川村家の存続の危機は脱したと思われる。

(三)の説は、北齋の父仏清の兄が井筒屋五左右衛門で、商店を営んでいたという話だ。しかし、井筒屋五左右衛門という店は『江戸買物独案内』にもものつていない。荒井勉によると「いづつや孫兵衛」という茶屋が「吉原細見」にあつたというが(注11)、中島家が、水商売の家を相手にするなど考えられない。高橋克彦によると、北齋の母は中島伊勢の姉で、井筒屋五左右衛門の弟だつた仏清と一緒にあつた事、井筒屋は代々身分を隠していた家系であつた事。などを述べている。(注12)。

井筒屋を屋号とした川村家とはどのような家だつたのだろうか。井筒とは、「井戸に落ちないように地上に木土管などでこしらえた囲い、(広義では、井戸側や紋所をも指す)」（新明解国語辞典・第三版）とされている。元禄三年(1594年)に豊臣秀吉が大坂城を築いた時、たくさんの石垣に使つた巨石を運ぶ時に、「井筒」という言葉がでてきた(注13)。

巨石の産地は、小豆島・屋島・大島などの瀬戸内海の島々や、六甲山の御影あたりである。樋口清元によると、「巨石を切り出した後、巨石は海岸の筏まで運ばれ、その巨石を乗せた筏に酒などの空樽をたくさん結びつけて

水中に浮かせ、たくさんの船でこれを引くのである。また、切り出した石を岸近くの海底に置いて、満潮のときに四艘の船から石の上に井筒の枠を組み、干潮のときにそれを船にくくりつけ次の満潮で石が水中に浮かんたところを船で引いて運搬する方法もあった」(注14)と述べている。

豊臣秀吉の大坂城築城にあたって、九鬼嘉隆という水軍大名が前述の井筒を使った方法で石を運び、その褒美にたくさんの巨石が与えられた(注15)。文禄四年(1594年)に九鬼嘉隆は、褒美の石を利用し、三万五千石の小大名にしては立派すぎる鳥羽城を作った。また、嘉隆の子の守隆は、駿府城築城に際しても紀伊・伊勢から木や石材の海上輸送を行っている。つまり、九鬼水軍は巨石運搬の名人だったのである。安宅船という大船や井筒も使ったことであろう。井筒と水軍との関係が分かった。ただ、井筒という築城方として使った意味は、平和の続いた江戸時代中期以降には消滅してしまっただろう。

北斎は「水の画家」とか海防船舶関係者と言われている(注16)。北斎には何か海とか海防に深く関わる必然性があったのだろうか。そこで北斎の「川村」姓と九鬼藩のつながりを調べることにした。まず、姓字から川村(河村)と江戸時代の水軍、治水に関係ある者をひろっ

てみた。

①川村重吉：伊達政宗の家臣となり、江戸初期に石巻港を開発(注17)。

②河村瑞賢：伊勢の国生まれの海運、治水業者で鉱山の開発も行い御家人となる(注18)。

③川村平右エ門：二五〇名の九鬼家の家老で、鳥羽藩から摂津綾部藩に移る(注19)。

④河村作左エ門：七一石の村上水軍の家臣。毛利家で海防問題に関わっていた(注20)。

この四人が見つかったが、該当するのは③の川村平右エ門である。次章では川村平右エ門について考察する。

第二章 綾部藩の川村平右エ門

元々は織田信長の家臣であり鳥羽城主となった九鬼嘉隆は、黒船と呼ばれる鉄板を装甲にした船(伊勢船)を建造したことで知られる。大砲三門、長鉄砲、鉄砲などで武装し、第二次木津川河口石山本願寺戦いでは本願寺側に味方する村上水軍を完璧に撃破した(注21)。その九鬼水軍連合艦隊の一艘が川村家出費の船であった。鬼の船揃いの絵にも川村の船が描かれている(注22)。九鬼嘉隆は、慶長五年(1600年)九月の関が原で西軍へ、嘉隆の息子の守隆は東軍へ分かれて属した(注23)。嘉隆は東軍の水軍の中に許せない敵がおり(注24)、守

隆は家康に気に入られていたという事情があったらしい。嘉隆は西軍に入ったとはいえ、実際に関が原に出陣した訳ではない。守隆は、当時日本最大の安宅船「日本丸」、「鬼宿丸」等の艦隊を鳥羽城へ入れて、兵や兵量、軍事物資などを東軍へ補給しようとした。ところが、嘉隆の支配する鳥羽城では大砲を守隆の艦隊へ向け、大手門を閉ざし、東軍支援を許さなかった。嘉隆の家臣で与力の川村甚右エ門信久、平右エ門信景父子は鳥羽城に登城し、嘉隆を説得しようとした。しかし西軍側から突如東軍側に寝返った稲葉家が、同盟軍の長束正家の近江国水口城を落城させ、こちらが攻撃態勢に入りつつあったので川村親子等が出撃し、戦闘では双方死傷者が多数出た。(注25)。

この事件は関が原の戦い後、家康の耳に入った。しかし嘉隆は家康に恭順な態度をとり、守隆の願いもあつて許された。一方、守隆は桑名城を破るなどの功により、鳥羽城を本拠とする伊勢国五万五千石となった。川村平右エ門信景はその後、木村重成長門守の軍に入り大坂冬の陣では大坂方の一員として戦った。そして大坂城が陥落した後、浪人となったが、再び守隆の家臣として川村信景は九鬼藩に迎えられた(注26)。

寛永時代になって徳川幕府は、九鬼家の兄弟によるお家騒動の罪で、鳥羽五万五千石を摂津三田三万六千石と

丹波綾部の一万九千石とに分けた。九鬼藩は摂津三田、丹波綾部と海とは全く縁の無い土地付となつてしまった。しかし、摂津三田藩と丹波綾部藩はその後も摂津三田藩家老の養子を綾部藩士の中から迎えるなど、友好関係にあった(注27)。

川村平右エ門は摂津綾部藩の配属となり、和州鷹取御在番職に就き、綾部城主隆季の下で勤め、最後には家老役となつた。また、平右エ門の息子金兵衛(川村信近)の子である川村平右エ門信興は、延宝八年(1680年)に、永井信濃守(淀城主)御景付城受取の際には、弓、鉄砲組の一員となり、可罷出御内意有とある(注27)。元禄二年(1689年)には江戸城付御目付、寺社奉行、そして町奉行になり、宝永元年(1704年)には綾部藩家老として江戸留守居となつた。

六代目の川村信清(平次右エ門)は、元禄八年(1695年)十一月に綾部藩江戸留守居となつた。寛延元年(1748年)五月に参勤交代で江戸から中仙道を通り、綾部へ帰る途中、坂本宿で藩主の私物が盗まれた時、奉行役の平次右エ門は、その場で荷才領御馬屋長兵衛と家来二人を手打ちにし、息子の川村信延と共に自殺した。信延が七代目になるはずだったが、信延の弟で信清の五男の信頭(幼名は友次)が継ぐことになった。しかし信頭は宝暦八年(1758年)、世襲を嫌がり江戸へ出奔す

る。また信頭出奔後に信延の子も亡命してしまい、家絶となる。しかし、文化元年（1804年）奇跡的に四六年も経って、川村家から養子に出ていた岡田文作典掌の子である彦四郎を川村信敦扱平右エ門として新たに綾部藩で召抱えた。信敦は天保四年（1833年）、江戸で徒目付御徒士頭、御納戸頭御手廻支配職などを勤め、その後、奉行になつている（注28）。

飯島虚心の『葛飾北斎伝』の中に、「北斎翁が葬式の時、兄弟姉妹甥姪なども来らずかの家元なる中島氏よりも、香花を手向けたるをきかざれば……」とある（注29）。仮に江戸に出奔した川村信頭が、北斎の父川村市良衛門（仏清）だったとすると、虚心の引用記事の背景も理解できる。市良衛門（仏清）と信頭が同一人物だと証明できる方法はないであろうか。綾部川村家の寺とやはり川村家の墓寺となつた元浅草誓教寺の過去帳に連続性があれば、同一人物の可能性が高いと考えられる。信頭は宝暦八年（1758年）まで綾部にいたがその後は江戸に在る。二〇〇三年一月現在、また誓教寺の過去帳では宝暦八年後八年間の消息確認はされていない。その理由が誓教寺の過去帳に川村の名が載り、出したのは、明和三年（1766年）で、それより以前に遡ることはできないからである。

虚心によると、浦賀潜居時代に倉田という商人宅に北

斎はいたという。倉田家は寛永以来浦賀におり、浦賀番所の用達をなし、中島伊勢とおおよそ同格の家であった（注30）。倉田家の過去帳によると、「北斎はわが家より出でし人」といつている（注31）。虚心の解釈では、わが家（倉田家）に一時住んでいたという意味にとつてゐる（注32）。由良哲次は、倉田屋藤三郎が北斎の叔父である川村八右衛門であるとも述べている。倉田という名は『日本史人物辞典』によると、「蔵多（倉田）氏は、戦国期における伊勢神宮の御師の一族で、糸魚川伊勢領に不入特権をもつ所領が上杉氏からあたえられていた」とある（注33）。もし浦賀の倉田が伊勢出身となると、伊勢五万五千石の時代から九鬼藩につかえた川村一族と同郷人となり、同じ藩から出たという意味で倉田家の記述となつたのではないだろうか。

第三章 北斎の考えた川村家の再興

享和元年（1801年）に北斎の父である市良衛門（仏清）が死亡するが、その前年に北斎が刀を所持している自画像を発表している。この絵は北斎の父親仏清の死期に何か役目を引き継いだものと想像される。その役目は川村家再興ではないだろうか。

文化元年（1804年）、北斎は「東海道五十三次」を発表している（注34）。従つてこの前に東海道を旅して

関西へ行っているはずである。そして同年の文化元年（1804年）に綾部川村も四六年ぶりに再興している。ここに何か関連があつたような気がする。

中島家の養子になつていた北齋だが、寛政七年（1795年）には中島家の相続権を長男富之助にゆずり、長男の名も代々の相続名である中島伊勢とさせた。その上で文化元年（1804年）には川村姓に戻っている。これは、川村家再興のために北齋が行動に出たことを意味する。つまり東海道五十三次を發表するために東海道を旅した一方、川村家を再興する工作に従事したと推察できる。北齋は文化元年（1804年）に東海道五十三次を發表し、売れっ子だつたはずなのに貧乏だつた。これは、すべてお家再興工作のために費やしたためだと推論する。

市良衛門（仏清）が信頭と同一人物だとすると、北齋は川村家をつぶした親の責任を感じ、また川村家が復興した際には、自らがその正当な後継者として綾部藩に再び仕えることを願つたのではないか。だが結果は信敦の登用だつた。北齋は川村信敦に会うのを避けていた。またその死の時まで川村姓を名乗ることもなかつた。川村信敦が天保五年（1835年）から天保七年（1837年）に江戸詰めとなつた時（注35）、北齋は天保五年から浦賀に潜む（注36）。川村信敦が次に江戸詰めとなつ

た弘化三年（1846年）から弘化四年（1847年）の期間に、北齋は幕府の水軍の長である向井将官監の屋敷のある、本所荒井町から西两国、田町一丁目住まいを経て、信州小布施（四ヶ月）に滞在していた（注37）。北齋の行動はこのように、川村信敦が江戸へ来るといなくなつていたのである（表1）。これらは単なる偶然だろうか。筆者は北齋が信敦から逃げていたと推察する。

北齋は、名前をもじつて遊ぶのが好きであつた。春朗時代には、黄表紙のペンネームに「是和齋」（これさいわい）と当時のやり言葉を使つた。北齋の最初の絵手本の名が「己応華夢多字画尽」（おのがばかむらむだじえずくし）と読み、その他、名古屋市立博物館所蔵の借金証文には（へくさい）がある。北齋はこのような調子で変名している。これ等を基に変名すると、北齋の父の市良衛門は、いちらえもん↓いらえもん↓平右エ門 となり、綾部川村がよく使つた名前になる。仏清は、ぶつきよ↓のぶつきよ↓信清 となる。信清（川村平次右エ門）は綾部川村の六代目になり上州坂本宿で切腹した人物で実父である。北齋の父の市良衛門≡清七≡仏清は本来ならば七代目となるはずだつた。その故に信清（六代目）の清をもらつていたのではないだろうか。

北齋と同様に、父の仏清も市良衛門、清七と名前が多いのはどうしてだろうか。何かから逃げているとしたら、

北斎より正体がわからない仏清の方であろう。仏師とされているが、仏清の仏像作品は発見されていない。誓教寺の「元祖仏清墓」が自然石の青海石であり、そこに「和」「仏清」と刻まれているのは仏清の生涯が穏やかでなかったことを意味するのではなからうか。青海石を墓石に使うことから、水軍の末裔の象徴のようにも思える。

結論

北斎の出自を探るために纏々述べてきた。川村家と北斎の関係を明らかにした資料は十分あるとは言えない。北斎没後一五四年経った今日、筆者を含めた全国の川村姓の人との家系をたどり、過去帳を基に研究しなければならぬ時期にきていると思われる。

今回は、九鬼藩家臣の川村家にスポットを当ててみた。その家系を遡ってみると、北斎は、綾部藩川村家八代目になる筈だったのが父の代で浪人となり、断絶となった川村家の復興という形で八代目に復帰しようと思ひ財を費やした。が、結局、綾部の川村は別に養子を迎えて再興してしまった。その結果、北斎は「川村」という姓を隠し通さざるを得なかったのである。

なお、本試論は川村兼章が資料調査、執筆し、加藤薫が監修、編集作業に徒手した共同作業の成果である。

〔注〕

- (注1) 荒井勉、『新訳・北斎伝』、信濃毎日新聞社、1998. p. 116.
- (注2) 飯島虚心、『葛飾北斎伝』、岩波書店、1999. p. 29
- 〜 31.
- (注3) 安田剛蔵、『画狂北斎』、有光書房、1971. p. 29.
- (注4) 飯島虚心、同上書、1999. p. 34.
- (注5) 高橋克彦、『葛飾殺人事件』、講談社、1990. p. 37.
- (注6) 荒井勉、同上書、1998. p. 44〜48.
- (注7) 高橋克彦、『歴史誕生 推理 北斎は隠密か』、角川書店、1991. p. 142〜143.
- (注8) 高橋克彦、同上書、1991. p. 144〜145.
- (注9) 高橋克彦、同上書、1991. p. 153.
- (注10) 安田剛蔵、同上書、1971. p. 34.
- 「先代中島伊勢の御妾で、北斎はその子供である」と書いてある。
- (注11) 荒井勉、同上書、1998. p. 31.
- (注12) 高橋克彦、『葛飾殺人事件』、講談社、1990. p. 262.
- (注13) 高野澄、『伊勢神宮の謎』、祥伝社、1992. p. 294.
- (注14) 樋口清之、『梅干博士の逆・日本史』、祥伝社、1995. p. 134.
- (注15) 高野澄、『同上書』、p. 294.

(注16) 佐野美術館、『特別展 画狂人北斎』、佐野美術館、2001. p. 69.

(注17) 樋口清之、同上書、祥伝社、1995. p. 134.

(注18) 日本史広辞典編集委員会、『日本史人物辞典』、山川出版社、2000. p. 263.

(注19) 日本史広辞典編集委員会、同上書、p. 263.

(注20) 川村信貞、『川村累計図』、川村家文書、1878. p. 3.

(注21) 熊谷直、『毛利家のシーパワーに学ぶ』、成山堂書店、2000. p. 48.

(注22) 熊野大社本宮、九鬼家蔵文書。

(注23) 熊谷直、同上書、p. 21.

(注24) 高野澄、同上書、1992. p. 294.

(注25) 川村信貞、同上書、1878. p. 6.

(注26) 川村信貞、同上書、1878. p. 6.

(注27) 日本史広辞典編集委員会、同上書、p. 311.

(注28) 川村信貞、同上書、p. 6.

(注29) 飯島虚心、同上書、p. 35.

(注30) 荒井勉、同上書、p. 31.

(注31) 荒井勉、同上書、p. 31.

(注32) 飯島虚心、同上書、p. 158～161.

(注33) 日本史広辞典編集委員会、同上書、p. 325.

(注34) 橋本健一郎、『浮世絵に描かれた人・馬・旅風俗』、神奈川新聞社、2001. p. 16.

(注35) 高橋克彦、『歴史誕生 推理 北斎は隠密か』、前掲書、p. 137.

(注36) 荒井勉、同上書、1998. p. 124～166.

(注37) 近藤和吉、『嘉永・慶応・江戸切り絵図で見る幕末・

事件散歩』、人文社、1995. p. 53.

表1 北齋と九鬼綾部藩川村家の関係史年表

西 暦	年 号	九鬼綾部藩川村家	葛 飾 北 齋
1600	慶長5年	甚右エ門信久、平右エ門信景家老親子、関が原の戦いで西軍の九鬼嘉隆についた。	
1614~15	慶長19年・元和元年	信景、木村長門守の軍に入り、大坂冬、夏の陣に敗れる。その後九鬼守隆の家臣となる。	
1695	元禄8年	6代目平次右エ門信景、江戸留守居役になる。	
1748	寛永元年	信清、信延親子が参勤交代の失態の責任をとって碓氷峠坂本宿で切腹。	
1758	宝暦8年	信延の弟信顕10石2人扶持となるが江戸へ脱藩、信延の子も脱藩し家絶。	
1760	宝暦10年		江戸本所割下水に生まれる。
1766	明和3年		川村家誓教寺過去帳にのる。
1793	寛政5年		中島伊勢に養子となる。
1795	寛政7年		長男に中島家の相続権を譲る。絵師として再スタートする。
1801	享和元年		刀を所持する自画像を描く。
1802	享和2年		父、市良右衛門(清七)死亡。
1804	文化元年	岡田家から養子を迎え7代目川村平右エ門信教とする。	東海道五十三次を題材としたシリーズを発表、前年に関西旅行か。
1810	文化7年		
1835	天保5年	7代信教、江戸御目付、御徒士頭、御納戸頭、御手廻支配役になる。	浦賀潜居、以後5年間、浦賀、伊豆、房総、江戸の旅客となる。
1836	天保6年		
1837	天保7年	信教、4月綾部にて再び上述の4役、御次目付等被仰付。	2月頃、内々で江戸に戻る。夏、浦賀より嵩山へ手紙を送る。
1839	天保9年	信教は奉行になる。	
1840	天保10年		房総旅行か。
1846	弘化3年	信教は江戸出府。	弘化元~4年の間2~3回小布施に長期滞在。
1847	弘化4年	信教は江戸にて50石加増。綾部隠居	
1848	嘉永元年		門人・本間北曜が2回面談、「鬼図」を贈る。
1849	嘉永2年		4月18日、浅草聖天町にて没。
1853	嘉永6年	信教前年没する。8代信敏、御道中御供頭、目付取次役、羅被仰付けられ江戸に。	